

大塚 千紗子 提出 学位申請論文（課程博士）

『日本靈異記の罪業と救済の形象』 審査要旨

### 論文の内容の要旨

大塚千紗子提出論文『日本靈異記の罪業と救済の形象』は、『日本国現報善悪靈異記』（以下『靈異記』）の中の人間の罪業を語る説話、罪を救済する聖人の説話を取り上げ、人間の欲望によって生じる罪業と救済が、如何に文学として描かれているのかを論じたものである。

本論文は、序論、第一部「罪業の形象」、第二部「聖人伝」の形象」、結論より成る。

序論では、本論文の目的と方法、概要に加え、全体の総論として『靈異記』における罪業観と救済の構造について整理し、かつ下巻第三十八縁に記された編者

景戒の夢見について検討し、これが『靈異記』編纂の動機と深く関わっていることを確認した。

第一部「罪業の形象」は、全六章から成り、編者の感得した「愛網の業」の問題を通して、人間がいかに罪業と対峙し、救済を得るのかを論じた。

第一章「狐妻説話における主題―愛欲の表現と異類婚姻譚―」では、上巻第二縁の異類婚姻譚の主題について考察した。まず、漢籍における狐の怪異譚を分析し、狐との恋愛は禁忌として語るべきものであったことを確認した。その上で、本縁は狐との愛欲と業の問題を提示することに主眼があり、男の求める美女としての狐の表現性から、男の愛着による婚姻とそこに生じる業を描いた説話であることを論じた。

第二章「狐妻説話における恋歌―「窈窕裳欄引逝也」との関係を通して―」は、第一章で取り上げた異類婚姻譚に見える歌に着目したものである。夫婦別離の際、狐妻が去る姿を見て夫が歌を詠む。その夫の歌を『万葉集』の類歌と比較すると、

夫の歌は、異界へと赴く妻への恋情を示したものであることが理解される。狐との婚姻は愛欲の業として位置づけられるが、歌を載せることで悲恋物語の要素が得られていることを論じた。

第三章「「愛心深入」における女の因業」は、中巻第四十一縁の蛇と娘の異類婚姻譚について論じたものである。登場人物の娘は蛇との二度の交接により命を落とすが、この娘の「愛心」と「神識」を死の原因とする叙述に注目し、「愛心」と「神識」の意味を仏典や仏教教理を通じて考察した。その結果、娘は強い「愛心」を持つ故に「神識」を改善し得なかつたと理解され、本縁は愛を巡る罪業の深さを描いた説話であると結論付けた。

第四章「姪洗なる慈母―子の孝養における救済―」で取り上げた下巻第十七縁の母は、自らの子の育児を放棄するが、死後の母に対し子ども達は「慈母君」と呼び、母の救済が示される。母を救済するという内容は、東アジア仏教圏において要請された主題であり、儒教思想で重視された孝養のモチーフが取り込まれて

いと見られる。なお、『靈異記』は罪人による罪の自覚を契機として、救済へと導く構造を持つのではないかと考えられ、本縁がその一つとして位置づけられる。これは第五章、第六章へと繋がる問題である。

第五章「盲目説話の感応と形象―古代東アジア圏における信仰と奇瑞―」で取り上げた下巻第十一縁は、盲目の母親が薬師如来の木像への帰依によって治癒を得る説話である。ここでは比較対象として「郷歌」と『雜宝蔵経』を取り上げ、仏との感応の方法を比較した。『靈異記』の盲目説話は、東アジア仏教圏の感応譚を享受しつつ、そこに人間の善行を奨励させる意図を込めた説話であると位置づけた。

第六章「宿業の病と無縁大悲」では、下巻第三十四縁の宿業の病者の説話に見られる「無縁の大悲」の語に注目した。宿業の病を背負う者が、「無縁の大悲」によって救済される姿を描く『靈異記』説話は、罪を自覚するものを救済するという展開を持ち、救済へと導く聖人の姿を伝える意図があると考えられる。これは、

第二部で取り上げる〈聖人伝〉の形象の問題へと繋がっていく。

第二部「〈聖人伝〉の形象」は、全四章から成り、罪業を救済する聖人が『靈異記』でどのように造形されているかについて考察した。

第一章「聖徳太子の片岡説話―「出遊」に見える〈聖人伝〉の系譜―」では、上巻第四縁の所謂「片岡説話」を取り上げ、「遊観」という表現に着目してその特質を論じた。中国撰述経典や『高僧伝』によると、「遊観」は仏教者としての資質を太子に付与する意図をもって使われた言葉であると見られるゆえ、第四縁は、仏典や仏教説話が語る聖人の話型を基にして形成された『靈異記』のための〈聖徳太子伝〉であると結論付けた。

第二章「『靈異記』が語る行基伝―聖人の眼をめぐって―」では『靈異記』における行基伝の特質について検討した。『続日本紀』に見られる歴史叙述とは異なり、『靈異記』の行基は、前世の事象を見通す「天眼」（または「明眼」）によって因果や罪を解き明かす能力を持つ存在として描かれている。『靈異記』編者

は、印度撰述經典等を踏まえた上で行基を、「眼力」を持つ聖人として造形していることを論じた。

第三章「行基詠歌伝承と烏の形象」は、第二章に続いて『靈異記』の行基像の一端を説いたものである。中巻第二縁は烏の邪姪を契機として妻子を捨て、行基に師事した信嚴禪師の出家と死、そしてその死を嘆く行基の歌によって構成される。本章では行基の歌と『万葉集』東歌との詞章の比較を行ない、『靈異記』が行基の詠歌を記載した意義について論じた。『高僧伝』の検討等から、行基の詠歌自体に僧の徳を示す役割があると結論付けた。

第四章「外道」なる尼—女人菩薩説話の形成—は下巻第十九縁の考察である。「肉団」（肉塊）から出生した女子が、舍利菩薩と呼ばれるに至るこの説話は、印度撰述經典である『撰集百縁経』や『賢愚経』で肉団から男子が生まれ阿羅漢となる話や、朝鮮半島の卵生始祖誕生譚等の神話的思考を享受しつつ、日本において肉塊から仏教者が誕生したことを語ること、そして女身の「菩薩」の（聖人

伝〉を語ることに意味があったと論じた。

以上、本論文は、第一部では恋や愛という他者への欲望から生まれる罪業と、救済をもたらす罪の自覚の問題を取り上げ、第二部では救う者を語る〈聖人伝〉の形象について論じたものである。いずれの場合も、東アジア仏教文化圏における『靈異記』の成立とその文学史的意義を検討するため、漢訳仏典類等を資料として用い、個々の表現の考察を通して説話の解釈を行ったものである。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、『日本国現報善悪靈異記』（以下『靈異記』）の説話の中から、罪業に苦しむ者と、それを救済する「聖人」の姿を中心に取り上げ、『靈異記』が描く人間の業と救済のあり方について、文学作品としての表現の営みを追究するという立場から論じられたものである。ここで取り上げられた各説話は、仏教説話

集としての『靈異記』の中心を為す説話群の中では異質な要素を含み持つものであるが、本筋から逸脱した話を敢えてちりばめたところに、編者の内奥に存在する表現への意志が窺えるのではないか、ということである。

例えば第一部の第一章と第二章では、本来は許されないはずの狐女との邪淫の業を描きながら、その婚姻を完全に否定するという描き方にはなっておらず、加えて歌による叙情の描出ということを行っている、ここには、罪業であるを知りつつ愛欲の業を棄てきれない人間への眼差しがあるという。それは第三章の蛇に交接された娘や、第四章で育児放棄をして愛欲に走った母の姿にも認められる。第三章・第四章ではその愛欲の業による因果によって死を賜るが、第四章の母は、子の孝養というテーマが加わることで死後に救済される。第五章と第六章は、宿業によって病に冒された者が信心によって救済されることを描く説話であるが、そこには罪を自覚する者こそが救済されるという構造と、救済者の存在を描き出すという編者の意図があるとす。そこに『靈異記』の本質の一端があるとす



が、編者がこのような説話を形成するに至る過程や動機付けを解明する鍵となるのが下巻第三十八縁に記された編者景戒の夢見の記述であると見られることから、本論文では序論をはじめ各章においてこの下巻第三十八縁に見られる表現に注目している。

第二部では聖人伝の形象を考察する。対象となるのは聖徳太子・行基・肉団から生まれた尼である。第一章では『靈異記』独自の聖徳太子伝の描き方について論じ、第二章ではこれも『靈異記』独自の行基の靈驗譚について論じる。第三章では行基の歌を取り上げ、行基の僧としての徳を示す話の中に弟子の死を嘆く歌が記される意義を考察する。それによると仏教説話としては詠歌自体に僧の徳を示す役割があるとするが、そのみでは終わらない点に『靈異記』説話としての特質があることを指摘する。最後の第四章では、肉団からの出生という特異な出自を持ち、後に尼となる女性が、行基と並ぶ「菩薩」として位置づけられることの意義を説いたものだが、「自土の奇事」を描こうとした『靈異記』にとって、

正にこの尼の存在、描き方の中に『靈異記』の主張があるとす。

本論文の特徴は、『靈異記』説話を、それ以前の日本の古代文献と比較するのは勿論のこと、漢籍、特に漢訳仏典・仏典註釈類から出典・典拠を求め、それと比較対照させることにある。その上で本論文は、これまで十分な検討がなされていない『靈異記』の文学研究という方面での立論を目指している。日本最古の仏教説話集である『靈異記』は、その性質により、古代仏教史研究、思想史研究、また貴族から民衆に至る社会・生活史の研究の立場から論じられることが多かった。加えて、説話研究の方面では、漢籍との比較の立場がある一方で、古代説話との繋がりや、昔話的な要素との関わりを説くものも多かったが、それらの研究成果が相互に関わり合うことが少なく、個別に論じられていく傾向にあった。本論文ではそれらを総合的に検討しつつ、東アジア漢字文化圏の中でどのような『靈異記』の各説話が形成され、どういった工夫によって個々の説話が描かれているのかということ、文学研究の立場から論じているところに意義がある。

研究史を重視し、作品内外の用例調査を徹底し、論証していくそのスタイルはオーソドックスなものであり、時に独自の見解を導き出すという点で物足りなさを感じさせる場合もあるが、研究の基本を大事にしていることが各論考の堅実さを支える要素となっているのは間違いない。但し、漢籍の世界は非常に広く複雑であるので、これらを網羅的に検証するのは困難であり、現状では出典や関連文献として提示している漢籍の引用について、その選択が適切であるのか否か、また引用した文章の理解の仕方に問題がないかどうか等、今後検証して行くべき課題は山積している。しかしながら、現段階において可能な限り、国内外の典籍を渉猟し、基本的な手続きを踏まえ、その上で従来にない新たな指摘・新たな説話解釈も随所に行っているところは大いに評価される。また、『靈異記』は現在多くのテキストが刊行されているが、その本文・訓読文には不明確な部分が多く、本文校訂、訓読文の検討が不可欠である。この点、従来の『靈異記』研究、特に説話の解釈に関する研究においては見過ごされがちであったが、本論文では各説話

を論じるにあたって、まずは対象本文と訓読文の曖昧な部分を写本から検証し、  
確定した上で論じていくという基本的かつ不可欠な手続きを踏まえている点は大  
いに評価出来る。

以上により、本論文の提出者である大塚千紗子は、博士（文学）の学位を授与  
せられる資格があるものと認められる。

平成二十八年二月十五日

主査	國學院大學准教授	谷口雅博	印
副査	國學院大學准教授	土佐秀里	印
副査	大東文化大學教授	山口敦史	印

大塚 千紗子 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士(文学)の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十七年十二月十八日

学力確認担当者

主査	國學院大學准教授	谷口雅博	印
副査	國學院大學准教授	土佐秀里	印
副査	大東文化大学教授	山口敦史	印